

三里塚

ペ平連



企画展示

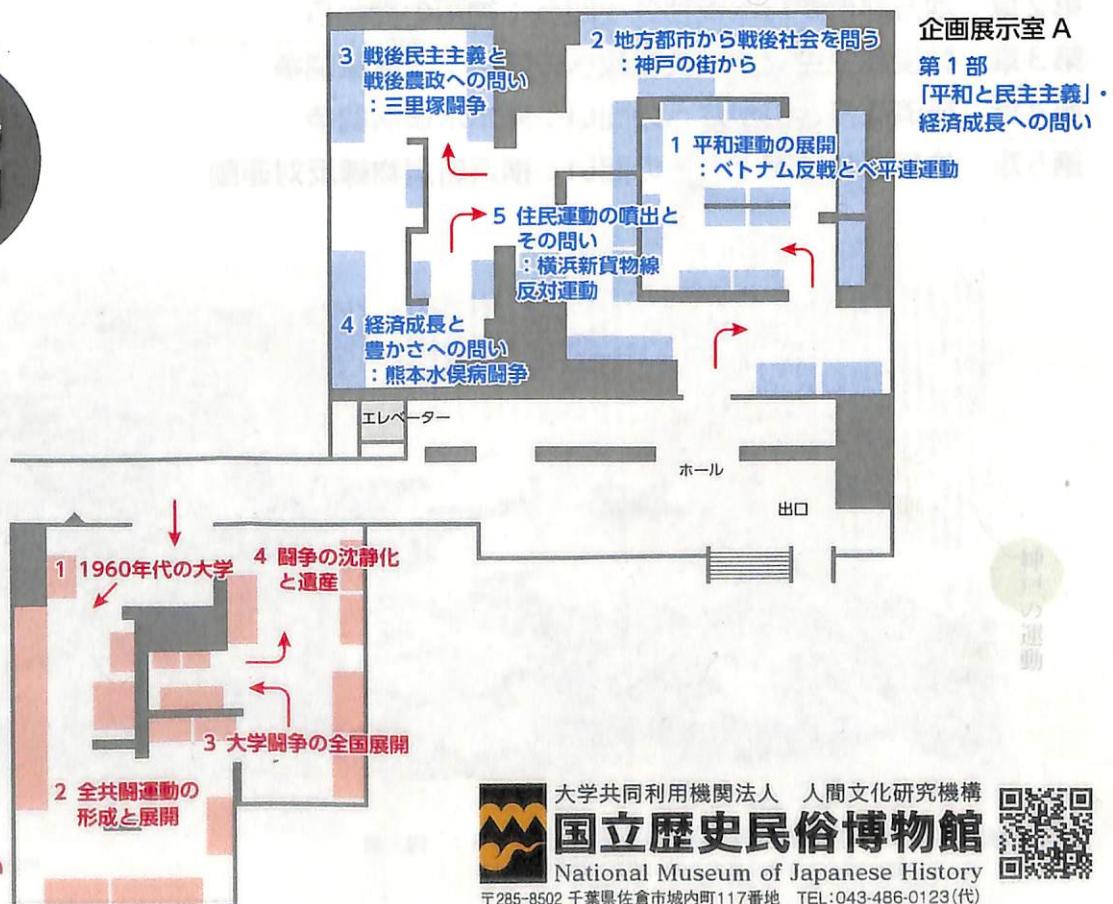
「1968年」 無数の問いの噴出の時代

2017年10月11日(水)～12月10日(日)

この企画展示は、日本の社会運動が、それまでの組織的な問題設定・問題解決方式に対し、「個」「私」の主体性を、そしてだからこそ、それぞれの人々（「わたし」、「われ」）が、それぞれに抱える問題を考え、「あなた」と議論し、時に「われ」と「われ」が結び、さらに社会にむけて「問い合わせ」を発することを重視するという特徴を強く顕しはじめた1960年代末の運動に総合的な光を当てようとしたものです。

展示のタイトルは、その数年の運動の高揚期の中で、最も尖った山場にあたる「1968年」という年をもって象徴的に表現しました。

会場案内図



第1部

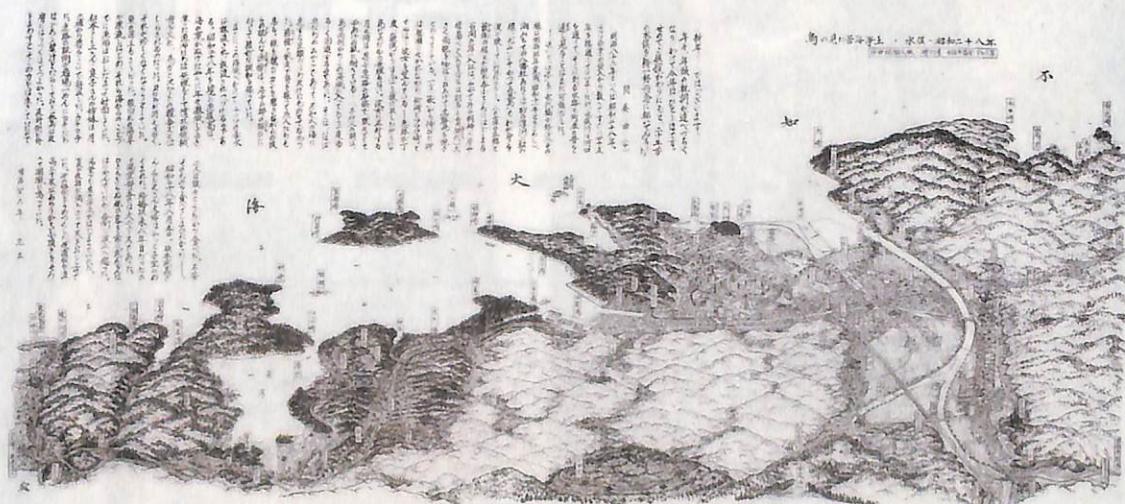
「平和と民主主義」・経済成長への問い合わせ

第1部「平和と民主主義」・経済成長への問い合わせ」は、第1章を「平和運動の展開：ベトナム反戦とベ平連運動」とし、戦後日本の平和と民主主義を、一国史的ではなく、アメリカを媒介とする日本とアジアとの関係性の中から問い合わせ返そうとしたベトナム反戦運動を最初におきました。ベトナム反戦運動は、世界的に見ても、日本の運動においても、この当時の社会運動の基盤をなすからです。ベトナム戦争への懷疑は、戦争の記憶を揺さぶりつつ、人々をベトナム戦争への積極的な批判行動に駆り立てました。特に、ベ平連は、アジアの人々に対し加害の側に立つ日本のありようを鋭く捉え、ユニークな運動形態を通じて市民参加の裾野を広げました。

第2章「地方都市から戦後社会を問う：神戸の街から」では、学生運動や反戦運動、差別への批判などを含めて地域内の諸運動の関係性、地域内の社会運動が全体として織りなす特性に焦点をあてました。関西という地場が有する、非常に多彩な社会運動の交錯に注目しました。

第3章「戦後民主主義と戦後農政への問い合わせ：三里塚闘争」および第4章「経済成長と豊かさへの問い合わせ：熊本水俣病闘争」では、この時代を代表しつつ、今日までも長期闘争として継続する二つの運動について、前者では農民闘争としての姿を軸に、後者は、公害患者の声、支援者の活動とともに文化的側面も加えて注目しました。第5章「住民運動の噴出とその問い合わせ：横浜新貨物線反対運動」では、多数の住民運動の中の代表格とも言える運動に注目しました。「公共」とは何か、という一貫した問い合わせは、当時の住民運動・地域闘争に大きな影響を与えました。

- 第1章 平和運動の展開：ベトナム反戦とベ平連運動
- 第2章 地方都市から戦後社会を問う：神戸の街から
- 第3章 戦後民主主義と戦後農政への問い合わせ：三里塚闘争
- 第4章 経済成長と豊かさへの問い合わせ：熊本水俣病闘争
- 第5章 住民運動の噴出とその問い合わせ：横浜新貨物線反対運動



砂田明 「鳥の見た苦海浄土・水俣一昭和二十八年 1973.1 個人蔵

ベトナムに
平和を!
福岡市民連合

福岡ベ平連の旗 個人蔵



神戸アメリカ領事館前で抗議のゼッケンをかけた姉と双子の兄弟
1965 個人蔵

長編記録映画

三里塚

第二砦の人々

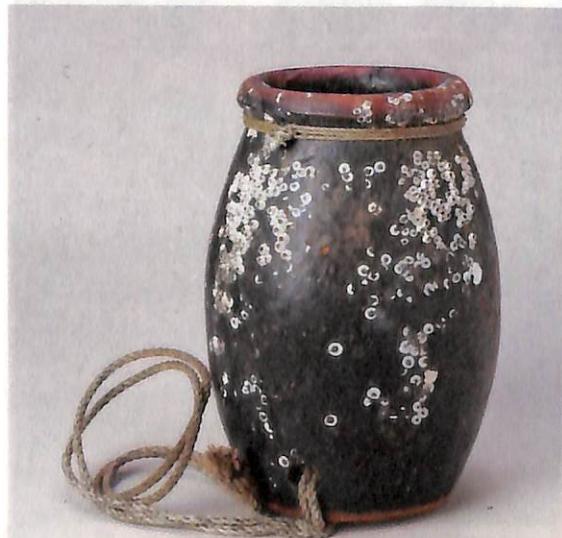
代執行阻止斗争の記録

小川プロダクション

長編記録映画 三里塚 第二砦の人々 代執行阻止斗争の記録(ポスター) 小川プロダクション
1971.5 成田空港 空と大地の歴史館蔵



「通すな貨物線」横浜新貨物線反対同盟連合協議会(ポスター)
1967頃 立教大学共生社会研究センター蔵



水俣漁夫のたこ壺 本館蔵

第2部

大学という「場」からの問い—全共闘運動の展開

1960年代末、日本の学生運動は戦後最大の高揚期を迎えました。この時期は、世界各国の若者運動・学生運動の高揚期でもあり、運動は、資本主義世界・社会主義世界のイデオロギー的対抗・分断を越えた広がりを見せていました。こうしたイデオロギーの相対化に関わって、この時期の学生運動の最大の特色は、政治党派と一定の距離を保持した、ノンセクト系学生を中心とする「全共闘」という組織形態の大学闘争が広範に展開されたことでした。

全共闘運動は、敗戦直後に広く誕生した学生自治会を基盤とした学生運動や、左翼政治諸党派の影響が強い学生運動形態からの転換でした。党派の有する組織規律・上下の指示関係から自由なこの運動は、学生一人ひとり=自由な決意を前提にした個人の集まりであり、党派の学生たちが関わった場合も、党派色を表面化させないことを原則としました。個人原理、個人の主体性を重視した運動という面において、第1部の諸社会運動と明らかな共通性が見られます。

当時の学生たち個々人は、ベトナム反戦や1970年に控えていた安保体制の改定、沖縄問題などの政治問題に浅からぬ関心を持っていました。しかし、政治的党派と距離を置いた全共闘運動の基本的な関心は、個々の大学における研究教育の現状、大学運営や制度の改革におかれました。その視線は、個々の問題解決を越えて、学問研究のあり方、自らの生と切り結んだ学ぶことの意味など大学という教育研究の「場」の根源的問題を見据えており、かれらの問いかけは、多くの学生たち、さらには教員層の意識をも深く揺さぶりました。

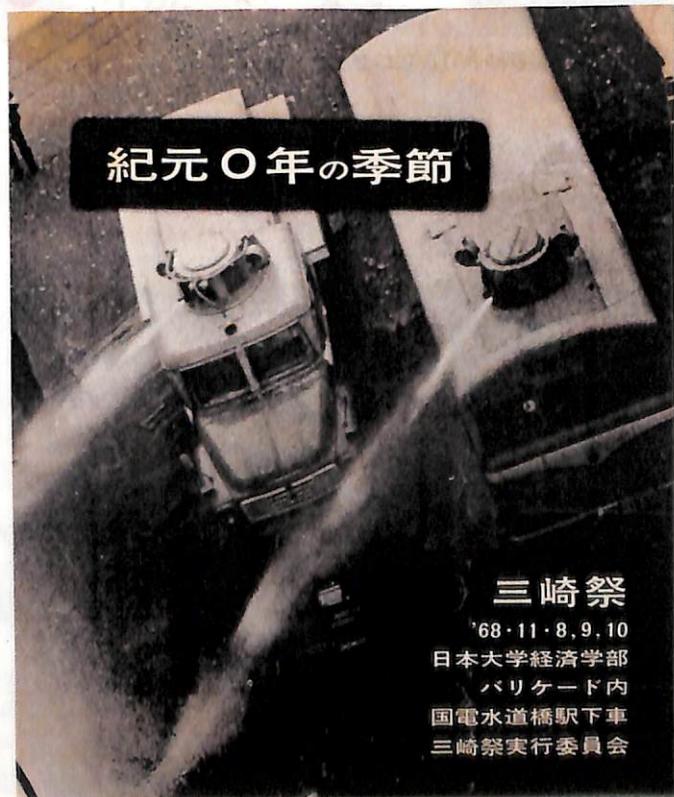
第2部では、このような質として捉えた全共闘運動を、1968年にほぼ同時に展開された日本大学及び東京大学の全共闘運動を中心に取り上げます。この二つの大学闘争は、規模においても、期間においても、両闘争が有した全国大学闘争への影響力から見ても双璧をなす位置にあるからです。

第1章 1960年代の大学

- 第2章 全共闘運動の形成と展開
- 第3章 大学闘争の全国展開
- 第4章 闘争の沈静化と遺産



日大全共闘ヘルメット 本館蔵



紀元〇年の季節 三崎祭(ポスター) 日本大学経済学部バリケード内
三崎祭実行委員会 1968 本館蔵